

## {西高卓球部第二部の記}

15期 瀬井勝公

30年ほど前から毎年1月頃、三鷹にある荻村さんの卓球場「ITS」に西高卓球部OBが集まって午後2時から5時まで卓球をし、その後三鷹駅北口の中華料理屋で懇親会をしている。そして毎週木曜日の夕方、ITSには2期の田中さんや5期の斎藤さん他数人の西高卓球部OBが集まって卓球をしている。「卓球やろう会」である。午後6時から9時が予約されており、最近の例では、早い人は6時に来てサーブの練習などをし、6時半ごろには全員集合、しばし個別の練習の後、7時半ごろからダブルスのゲームを10セット程度行い、8時半ごろからITSのラウンジで軽くビールを飲んであれこれ雑談。参集者一同の写真を撮って、一番遠くに帰られる田中さんの電車の時刻に合わせて散会する。

木曜日の会は40歳以上をメンバーの要件とはしたものの、新たに後輩が加わることはなく、1期生から15期生という当初の年代構成は30年間変わっていない。小生はずっと「一番若い」最下級生なのだ。練馬在住の小生には、三鷹への交通がやや不便なうえに、発足当時は2年単位で勤務地が変わる状況で、三鷹に行ける機会は多くはなかった。15年ほど前に現役を退き、コンスタントに参加できるようになった。無心にボールを打ち合う時は、仕事や家庭の悩みから自由になれるし、一回りも年齢が違う先輩ではあるが、同じクラブにいたということで連帯感があって話が弾む。同窓生という共通の価値観や人生観で組み立てられた非常に楽しい会である。

小生、西高卓球部にはまったくの初心者で入部し、高校卒業後もITSに行くまで全く卓球をしていなかったもので、20年ぶりにラケットを手にするとフォアハンドからしてうまくいかない。昔はどう振っていたのだろうと試行錯誤し、結局は在校間の卓球の練習過程を再び繰り返して何とかフォアハンドを回復、ショートや突っつきに練習範囲を広げた。長いブランクの後では昔やった訓練の過程を急ぎ足でトレースして元に戻るということなのだろう。

ITS では何人かの先輩がラケットをペンホルダーからシェークハンドに変えた。シェークハンドは合理的とは思いますが、ペンホルダーとは全く異なるから、特に高齢でラケットを変えるのは大胆な決断と思う。先輩たちのチャレンジ精神は半端ではなく、白髪の老人が鏡の前でフォームを確認する姿は圧巻であったし、全日本卓球選手権を観戦した次の練習ではそれぞれに新しい打法に挑戦する兆しがあった。荻村さんも「新しい技の開発に興味がある」と意欲を示しておられたが、何歳になっても意欲と熱意を持つという生き方は西高卓球部のメンタリティなのかもしれない。

シェークハンドでカットボールを打つのは田中さん一人しかなく、メンバーは時間を区切って順番にカット打ちを練習する。ずっと卓球を続けてきた人は遥か昔の高校のことなど考えはしないだろうが、20年のブランクがあると他に比べるものがないから在校間の卓球を思い出す。カットを打ちながら、昔はもっと打てたはずだ、もっと鋭く返せたはずだ、など考えてしまう。20年前の自分との格闘だが、本当は昔だってそんなに打てなかったのかもしれないのに。

先輩達がシェークハンドに代える中、小生はペンホルダーを変えなかった。重いラケットが嫌なこと、在校中にペンホルダーでバックハンドを振ることができたことがその理由である。小生のバックハンドは、ITSで少し進歩した。

ITSに行き始めて何年か経ち、斎藤さんから「フォアバックをやろう」との提案があった。小生在校中のバックハンドは、台上の浮いたボールであればバックで打てるという程度で、自由に打てるわけではなかった。斎藤さんのバックのショートに対して、こちらはフォアのストレートとバックのクロスを交互に打つという練習が始まった。在校中にはボールはフォアハンドで打つものだと言われ、回り込んで回り込んでフォアハンドで打つフットワークを練習したことを思うと発想の大転換である。

少しづつバックハンドが打てるようになったので、台に近づいたり離れたり、更に台上で打ってみると、テンポの緩急が面白くなった。そして中国の選手がやっていた前陣速攻というのはこれかと理解された。最近になってようやく台上でも台から離れても、強くも軽くもバックハンドを打てるようにはなったが、この進歩は100%斎藤さんの提案と彼女のショートでの正確な返球によって得られたものである。

カット打ちのときには「昔はできたはず」と思い出したのとは反対に、バックハンドができるようになると「今できることがなぜ在校中にはできなかったのか」との疑問がわいた。練習に熱意が欠けていたか、そんなことはない、寒い冬同級生と二人で早朝練習したこともある。練習のやり方がうまくなかったのか、そうなのだ。小生在校間は、初心者でもあり概ね他人に言われたことをやり思いつきで練習していたように思う。今回のバックハンドの練習では斎藤さんの適切な示唆と練習のサポートと励ましに加え、なにより本人が主体的に練習した。在校間とは、練習のやり方に進歩変化があったのだ。

ITS では OB が集まって昔の卓球していたのではない。40 ミリボール、11 ポイント制、プラスチックボールなどの変化は直ちに取り入れて適応した。しかしチームとして大会に参加するようなことはしなかった。もし外部と試合をしていたならば、既に習得しているペンホルダーを捨ててシェークハンドに挑戦するというような発想は生まれなかったかもしれない。

木曜日の ITS では、西高卓球部で練習をしたことがある人たちが、年を経てもなおそれぞれの卓球を追求し練習していたのだ。いわば西高卓球部第二部で、小生にとっては、バックハンドを含めて自分の卓球を一応の形にまとめることができたし、先輩の後姿を見て 10 年先の自分を考え、西高以来の人生をゆっくりと振り返る機会でもあったのである。

以上、最下級生の立場からの見聞や体験を紹介した。実は田中さんは昨年末から練習に参加していない。小生も 8 月以来三鷹に行っていない。30 年の間には、ITS に来られなくなった方もあるし、荻村さんをはじめ亡くなられた方もいる。仕方のないことだ。卓球も西高卓球部もそれぞれの人生の一部なのだ。